

平成 23 年 5 月 10 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2009～2010
 課題番号：21792195
 研究課題名（和文） 病院勤務看護師の感情労働のプロセスの再検討と量的研究モデルの形成に至るまで
 研究課題名（英文） Reexamination of the process of nurse's emotional labor and generating theoretical Models
 研究代表者
 片山 知美（KATAYAMA TOMOMI）
 関西福祉大学・看護学部・助教
 研究者番号：30510812

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、看護師の感情労働のプロセスを明らかにし、量的研究のためのモデルを形成することであった。そこで、中堅以上の看護師 26 名と、新人看護師 14 名に対し面接調査を行った。その結果、感情労働のプロセスモデルを形成するカテゴリーは、1.【情の交流の表層レベル】2.【自己の看護に対する違和感】3.【現実とのズレに伴う葛藤と混乱】4.【既成の社会的役割からの脱却】5.【情の交流の深層レベル】6.【特化された社会的役割の獲得】7.【体験の意味の創造】8.【職業観の変容】9.【経験的知識の再編成】の 9 つのカテゴリーが確認された。また、これらカテゴリーは循環プロセスを形成していた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was Reexamination of the process of nurse's emotional labor and generating theoretical Models. 26 senior nurses and 14 new nurses were interviewed the episode of emotional experiences. The data was analyzed using Grounded Theory Approach. As a result, nine categories were extracted; 1.Surface level of exchange of emotion, 2.Sense of incompatibility to one's nursing, 3.Conflict and confusion to gap between ideal and reality, 4. Taking oneself free from established social role, 5.Deep level of exchange of emotion, 6. Acquisition of being specialized social role, 7. Creation of meaning of experience, 8. Transformation of schema on occupation, 9. Reorganization of empirical knowledge. Also, these categories formed the circulating process.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2009 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2010 年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護哲学、感情労働

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

感情労働に関する研究は、1975年のHochschild,A.R.による論文(The Sociology of Feelings and Emotion : Selected Possibilities)が端緒となっており、近年、社会問題となっている職業の社会化現象、特に看護における感情労働としての社会化として注目されている(田口,2001)。感情労働は、客室乗務員を対象とした研究から、相互行為過程において個人に一定の感情経験の表出・保持を要請する「feeling rule(感情規則)」の発見から導き出された概念であり、「明るく親切でしかも安全な場所でお世話されていると他者にも感じてもらえるような外見を保つために、感情を出したり抑えたりすることであり、私的な文脈で行われる感情ワークや感情管理を職業としておこなうものである」とされている。さらに、この概念を看護に置き換えて様々な研究がなされている。しかし、先行研究の多くは、看護が感情労働であることを指摘しているのにとどまっておき、看護職が実際に感情労働をおこなう過程、さらにその中で直面する困難性を看護の視点に立って十分に検討した研究は管見では存在しない。

2. 研究の目的

本研究では、実際に看護師が行っている様々な感情労働のパターンを質的に抽出し、量的研究に耐えうる「感情労働のプロセスモデル」を形成することを目的とした。

3. 研究の方法

1)研究対象者

本研究の対象者は、関東・中部・関西圏内の中・大規模病院で勤務する看護師とし、インフォーマントの紹介を経て、個人単位で研究協力への許諾を得た。また、わが国で看護教育を受けた日本人看護師とした。対象者数は、理論的飽和に達した時点でその後のインタビューを中止する研究手法をとったため、最終面接人数は40人であった。

2)調査方法

面接の種類は、対面式の半構造化面接とし、面接場所は第三者の介在がない場所とした。

3)分析方法

本研究では、StraussとCorbinにより改良されたGrounded Theory Approachによる分析を行った。また、分析は継続比較分析を行った。一連の分析はデータ収集と同時進行で行い、常にスーパービジョンを受けた。さらに、妥当性を検証するためにコミュニケーションによる妥当化を郵送法と面接法により行った。

4)倫理的配慮

データ収集においては、文書および口答で研究の目的と方法、データの秘密性と匿名性の確保、研究参加拒否や中断による不利益がないこと、録音データは研究終了後に破棄すること等を十分説明し、同意の上ICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。なお、本研究は関西福祉大学看護学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

対象者の選定は理論的サンプリングの手法に沿って行い、調査初期の段階では、様々な看護実践力のレベル、職位にある看護師10人を対象とした。次いで、看護実践力のレベルや職位等によって感情労働や、その労働におけるストレスの対処の仕方に違いがあったため、特に感情の揺さぶられを多く感受していた管理職以外の看護師を中心に6人のサンプリングを行った。さらに分析から得られたカテゴリーについて、感情労働のプロセスを形成するカテゴリーとして妥当であるかを検討するために、7人の達人、熟達レベルにある看護師を中心にサンプリングを行い、病棟勤務看護師が実際に行っている様々な感情労働のパターンを質的に抽出した。また、同時に理論的サンプリングを繰り返し、その時点で明らかになっている感情労働のプロセスのストーリーラインにあてはまらない反証事例の検証を行った。その結果、【情の交流の表層レベル】【自己の看護に対する違和感】【現実とのズレに伴う葛藤と混乱】【既成の社会的役割からの脱却】【情の交流の深層レベル】【特化された社会的役割の獲得】【体験の意味の創造】【職業観の変容】【経験的知識の再編成】の9つのカテゴリーが明らかとなった。また、中堅レベルに達したばかりの看護師の感情労働において特徴的なパターンが確認された。これは、感情労働を繰り返す中で自己成長していく看護師がいるのに対して、ストレスフルな状況下におかれている者や、離職を考えている者がいた点である。そこで、ある程度の経験を積んだ後に臨床を退いた看護師3人をサンプリングし面接調査を行った。その結果、臨床で看護師を続けている者に比べ、【体験の意味の創造】が行われておらず、【職業観の変容】、【経験的知識の再編成】に至ることのない感情労働のパターンが明らかとなった。

そこで、感情労働に最も不慣れと考えられる新人看護師14名に対し面接調査を行った。また、そのうち10名に対しては、入職後3か月と6~12か月の時期に縦断的調査を行い、【体験の意味の創造】に至る過程において欠けている要因を引き続き検討した。その結果、入職3か月目までに、すべての看護師が、患

者-看護師関係において何度も感情労働を経験しており、この経験から「看護師としての自覚」「これからの看護師としての期待感」「学習への動機」を高めていた。また「感謝されることへの喜び」「早くできるようになりたい焦り」「できない自分に対する怒り」「自分の看護を表現しきれなかった反省」といった影響を受け、自己研鑽に励む、同期の看護師と話す、上司に相談する、経験のある看護師から教えを請うなどしていた。一方で、「責任の重圧」「自分の未熟さに対する不安」「コントロールしきれない感情の揺さぶられ」によって看護師として続けていくことに不安を抱えている者や、今の配属先で続けることに不安を感じている者もいた。これらは、中堅以上の看護師を対象とした、研究結果で明らかにしてきた、9つのカテゴリーからなる感情労働のプロセスである【情の交流の表層レベル】【自己の看護に対する違和感】【現実とのズレに伴う葛藤と混乱】【既成の社会的役割からの脱却】【情の交流の深層レベル】【特化された社会的役割の獲得】【体験の意味の創造】【職業観の変容】【経験的知識の再編成】の、特に【現実とのズレに伴う葛藤と混乱】の段階において影響があることが明らかとなった。その後、入職6～12か月の時期に行った調査では、特に「死の看取り」、「患者の状態変化（急変）と出会う」、「患者の感情表出（不安・怒り・悲しみ・苦しさ）に触れる」、「患者・家族からの感謝」といった感情労働の経験を印象的に記憶していた。また、「死の看取り」、「患者の状態変化（急変）と出会う」、「患者の感情表出（不安・怒り・悲しみ・苦しさ）に触れる」という感情労働を経験した初期段階においては、自己の気持ちを一時的に負の方向へ引き寄せていた。しかし、その後、正の方向へ引きもどしていることが確認された。一方、「患者の状態変化（回復）と出会う」、「患者の感情表出（喜び）に触れる」、「患者・家族からの感謝」では、経験当初は自己の気持ちを正の方向へ引き寄せ、その後、それを持続させていた者と、負の方向へ引き寄せられたり、正の方向に引き戻されたり流動する者がいた。このことから、病院勤務看護師の感情労働のプロセスは、【情の交流の表層レベル】【自己の看護に対する違和感】【現実とのズレに伴う葛藤と混乱】【既成の社会的役割からの脱却】【情の交流の深層レベル】【特化された社会的役割の獲得】【体験の意味の創造】【職業観の変容】【経験的知識の再編成】の9カテゴリーが循環プロセスになっており、看護師として継続していくことに不安を感じたり、解決の見通しが見えないストレスを抱えるなど、ストレスフルな状況下にあるときに循環プロセスが乱れる感情労働のパターンが発生することが明らかとなった。

結論として、感情労働のプロセスモデルは、1.【情の交流の表層レベル】2.【自己の看護に対する違和感】3.【現実とのズレに伴う葛藤と混乱】4.【既成の社会的役割からの脱却】5.【情の交流の深層レベル】6.【特化された社会的役割の獲得】7.【体験の意味の創造】8.【職業観の変容】9.【経験的知識の再編成】の9つのカテゴリーから成り立ち、循環プロセスを形成していた（図1）。また、このプロセスは、一時的におこるものではなく長期継続的におこるものであることが確認された。

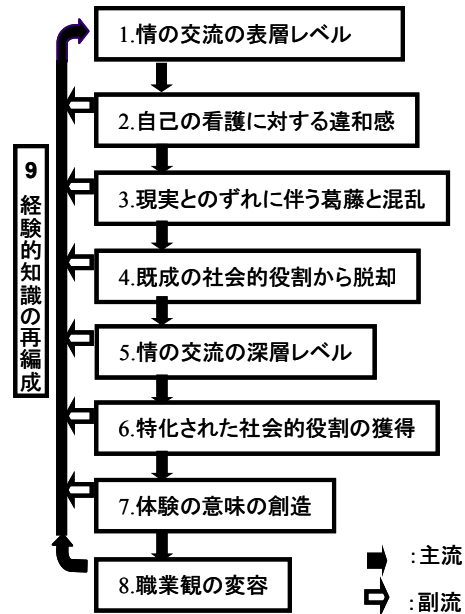


図1 看護師における感情労働のプロセス

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計6件）

片山知美：看護師における感情労働のパターンとその分析の結果，看護科学学会，2009

片山知美：看護師における感情労働が看護に与える影響に関する研究，ヘルスカウンセリング学会，2009

片山知美：看護師が病棟勤務中に体験する感情の揺さぶられに影響を与える要因の検討，日本保健医療行動科学学会，2010

片山知美：病棟勤務看護師が経験する感情の揺さぶられが自己に与える影響，日本健康心理学会，2010

片山知美：新卒看護師が入職3ヵ月目までに体験する感情労働の特徴，ヘルスカウンセリング学会，2010

片山知美：新卒看護師が入職3ヵ月目までに
経験する感情労働によって個人が受ける影
響，日本看護科学学会，2010

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

〔その他〕（計0件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片山知美 (KATAYAMA TOMOMI)

関西福祉大学・看護学部・助教

研究者番号：30510812

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし